

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第39号

2017年12月16日

マタイ受難曲 各論-10 (第34, 35, 36, 37, 38, 39曲)

第34曲 レチタティーヴォ「私のイエスは偽証に沈黙する」(前号より続く)

バッハがこの曲にヴィオラ・ダ・ガンバを付け加えたのは晩年(1742年頃)の演奏に際してのことでした。それはそのとき演奏された聖ニコライ教会にはオルガンが1台しかなく、そのため第2アンサンブルの通奏低音楽器としてオルガンに代わってチェンバロを使うことになり、低音部が薄くなることを避けるための措置であったということです。前述の通り私たちの演奏会ではガンバのパートをチェロが演奏しますが、通奏低音にはコントラバスとチェンバロ(の音色)を使うことにしています。

この曲では8分音符の和音の間に挟まる8分休符が重要です。この休符がイエスの沈黙を暗示しているからです。また、フリードリヒ・スメントは「バッハの教会カンタータ」(バッハ叢書第6巻、角倉一朗訳。日本語版 295 ページの大著です)の中で曲中この和音が39回現れることから、イエスの受難を予告すると解釈される旧約聖書詩編39番を示している、と述べています。

第35曲 アリア「耐え忍ぼう、耐え忍ぼう！」(テノール、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音。4/4拍子、イ短調)

マタイ受難曲中唯一の通奏低音のみ(ガンバも同じ音を演奏します)を伴奏とする、48小節の短いアリアですが、カンタータの中には同じ編成のテノールアリアが沢山あります。バッハはテノールに大きな課題を与えることが好きだったらしく、この曲のように伴奏がコンティヌオだけだったり、急速なメリスマ、音程の大きな跳躍など、ソリストを悩ませるアリアを多く書きました。きっと優秀な歌手が使えたのでしょう。

通奏低音の楽譜にはバッハとしては珍しくスラーをつけて、アーティキュレーション(音の区切り)を明確にしています。これは二つの音を結びつけることによりイエスの沈黙(口を結ぶ)を表していると考えられます。また、バツ・オスティナート(固執低音)の技法を使うことで忍耐を象徴しています。和音を示す数字には6, 7, 9度の不協和音が多く現れ、厳しい状況と忍耐の苦しさを表現しているかのようです。

直前のレチタティーヴォでは沈黙を守るイエスの意志を信徒に伝え、このアリアでは信徒のあり方を説いています。イエスに倣って軽挙妄動をいさめる歌詞は、テノールパートのシンコペーションやギクシャクとした音の跳躍と相まって、美しさと言うよりは痛切な訴えを感じさせる音楽です。

第36曲 大祭司の尋問(続) (エヴァンゲリスト、大祭司、イエス、群衆)

イエスの沈黙に業を煮やした大祭司は、切り札と言うべき問いを発します「おまえは神の子、救世主キリストか?」。イエスは答えます「その通りだ(あなたはそう言う)」。イエスの言葉「あなたたちはやがて見る。人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗ってくるのを」に対応して、第1、第2ヴァイオリンは8小節から3小節間、雲を思わす音型を奏でます。これを聞いた大祭司は激怒し、イエスの衣を引き裂いて「この男は神を冒涇した、どうすべきか?」と自ら動員した群衆に問いかけます。激高した群衆は口々に「この男は死罪にあたる」(8声の合唱)と叫んで、イエスに唾を吐きかけ、拳で殴り、平手で打ってこう言います「当ててみろキリスト、誰が殴ったか」。この曲から始まる群衆の合唱はやがてローマ総督ピラトの法廷、そしてゴルゴタへの道行き、ゴルゴタの丘へと続き、ドラマの進行に重要な役割を果たすこととなります。

第37曲 コラール「誰があなたをこんなに殴ったのですか」(4声体単純コラール。4/4拍子、へ長調)

第10曲と同じパウル・ゲルハルトのコラール、その第3節が歌われます。「貴方は罪人ではないのです」とイエスを擁護します。へ長調という牧歌的な調性(ベートーヴェンの「田園交響曲」にも使われた)は、イエスの無実を穏やかに主張します。実際の演奏で合唱は激しく群衆の叫びを歌った直後、一転して和やかともいえるコラールを歌うのですから、その切り替えが難しいところでもあります。

第38曲 ペトロの否認(エヴァンゲリスト、女中、ペトロ、居合わせた人々)

イエスが捕らえられたとき、一度はその場から逃げたペトロではありましたが、師の身の上を案じて密かに大祭司の屋敷に潜り込み、尋問の様子をうかがっていました。そこに一人の女が近づき「あんたもガリラヤのイエスと一緒にいたよね」(ちょっと下世話な物言いにしてみました)と言うので、身の危険を感じたペトロはとぼけます「何言ってんだ、おまえは」(最初の否認)。この場においては危ないと、彼は門の方へ行きますが、そこに又一人の女が彼に目をとめて咎めます「こいつはナザレのイエスと一緒にいたよ」。焦ったペトロは否定します「そんな人知らないよ」(二度目の否認)。ところがこれを聞きつけた人々が彼を取り囲んで言います「(いや)確かにおめえも奴の一味だ、言葉の訛りが奴と同じじゃねえか」。人々の合唱はホモフォニーで口をそろえます。絶体絶命のペトロは激しく誓います「そんな人は知らない！」(三度目の否認)。

そのときイエスが言った(第16曲)とおろし鶏が鳴きました。ヨハネ受難曲ではこの場面(第12曲c)で通奏低音がへ長調の4和音(F7th)をアルペジオで奏でて鶏の声を模倣しますが、「マタイ」では嬰ハ短調の終止形を弾くだけです。しかしここから、これまで事態を冷静に語っていたエヴァンゲリストが突然、激しい感情をあらわにしてペトロが受けた衝撃と悔恨の気持ちを、始めはレチタティーヴォで、やがて「外に出て激しく泣いた」をアリオソで歌います。しかし「ヨハネ」のようにまるで自分がペトロに成り代わったかのように、身をよじるような嘆きではなく、“weinete(泣いた)”につけられたメスマはわずかに1小節(「ヨハネ」では延々4小節に及ぶ)に過ぎません。しかしここがエヴァンゲリスト歌手の聴かせどころの一つであることは間違いなく、私見ですが聴く者にとってはあたかも歌舞伎「勧進帳」の一場面を見るかのような効果を上げます。

第39曲 アリア「憐れんでください、私の神よ」(アルト、ソロヴァイオリン、弦楽器、通奏低音。12/8拍子、ロ短調)

マタイ受難曲の中で、というよりバッハの全作品中最も有名なアリアです。ピチカートに通奏低音が刻むシチリアーノのリズムは第1曲と同じ12/8拍子、調性も第1曲の属調であるロ短調です。ソロヴァイオリンは forte、伴奏の弦楽器群は sempre piano とバッハ自身がダイナミクスを指定しています。主題の旋律は受難コラール「おお御頭、血と傷にまみれ」から派生したものであることは、冒頭の通奏低音の動きがまさにこのコラールのメロディであることから容易に判ります。和声学で言う「バス課題」に対する模範解答のようですね。聴く者の胸を激しくえぐる痛切で美しい主題はヴァイオリンからアルトに引き継がれ、掛け合いを繰り返しながら発展してゆきます。歌詞はペトロの心そのものですが、アルトはペトロに代わって普遍的な人間として主なる神に憐れみを乞います。

このアリアで特徴的なことは、アルトが「"Erbarme dich" 憐れんでください」と歌った後(32小節)、通常であればダ・カーポするところですがそうせず、1小節の休みを置いて歌詞、旋律とも歌い出しの9小節とは異なる16小節に似た動きを見せて、そのまま46小節の終止形へと進むのです。これを受けたヴァイオリンもダ・カーポではなく、続けて書かれた前奏と同じ楽譜を後奏として弾き、曲を締めくくります。聴く者は簡潔に引き締まった音楽によって、このアリアのインパクトを一層強く感じるようになります。

【後記】今年も最後の練習となりました、一年間お疲れ様でした。また「清水ヶ丘の風」にお付き合いいただき有り難うございました。小論は完結までまだあと29曲、練習期間中に終わるのかどうか怪しくなっていますが、引き続き執筆に注力いたします。いよいよ来年4月は本番、年が明ければもう追い込みになります。寒さの厳しい季節ですが、くれぐれもご自愛ください。皆様にとって来年も良い年でありますよう、心からお祈り申し上げます。(新井治男)

